

ゲッカビジンの開花調節

永井親雄

はじめに

一般的に 21 時～22 時頃に咲き始めるゲッカビジンをシェード・電照処理により、昼夜逆転させ、日中に開花・展示できるよう大阪市咲くやこの花館の資料に基づき実証した。

基本的な電照・シェード処理時間及び処理時期

21:00～11:00 明 40W 電球 5 個

11:00～21:00 暗

蕾長約 25cm、先を持ち上げた状態 写真 1

処理方法

(1) 処理前

栽培温室 2 号棟 (寒冷紗張、無冷房) で栽培管理

(2) 移動

蕾長が 20～25cm 時に、フクシア温室下倉庫をアルミシートで目張り・暗黒にし、さらにパイプで同シートによる暗黒室 (1m×2m×1m) を作り、搬入した。室温はフクシア温室冷房の影響で日中も 20℃である。

結果

① 2005 年 6 月 28 日 16:30 搬入

→ 7 月 4 日 14:00 頃開花

② 同年 7 月 25 日 16:40 搬入

→ 7 月 28 日 12:30 頃開花

②は、蕾長が 30cm 程度のものもあり、これらは入庫後、25 日、26 日の夜間に咲いた。また、①の開花が 14:00 と遅かったので、②は 1 時間処理を早め、20:00～10:00 明、10:00～20:00 暗としたところ開花が 1 時間ほど早くなった。

以上のことから、処理後 3 日、7 日と開花にバラツキがあるものの日中に開花させる実証はできた。また、夜間開園 (17:00～21:00) に合わせた開花処理にも今後取り組んでいきたい。

展示

大温室ロビーに展示し、園内アナウンスで周知した。



写真・開花調節中のゲッカビジン

アキメネス底面給水栽培試験

高井 敦雄

株の大きさに似合わず大きな花を次々と咲かせるアキメネスは、花の少ない時期の盛夏時に花のシーズンを迎えるため、展示効果の高い貴重な鉢花である。しかしながら、多くの品種を保有する当園は、乾きの早い盛夏時はかん水にかなりの時間を割く必要があり、栽培する上で大きな負担となっていた。そこで、かん水労力の軽減を図るため、底面給水栽培が可能かどうか試みたので、その結果を報告する。

栽培方法

5 号のプラ鉢の底から底面給水用の不織布を鉢の高さのおよそ 3 分の 1 まで通し、鉢底にボラ土 (大) を一並べし、そこに赤玉土 (小)、腐葉土、ボラ土 (小) を等量混合した培養土を入れた (写真 1)。なお、この培養土には元肥としてマグアンプ K を約 3g/ℓ 添加している。1 鉢には 5 株を定植した (写真 2)。栽培温室 5 号棟のベンチ上に木枠とタフニールを使用して水を貯めた水槽を作り、その上にエキスパ

ンダメタルを設置した (写真 3)。鉢は、そのエキスパンダメタルの上に設置した (写真 4)。コントロールは通常の手かん水である。追肥は、7 月上旬に 1 回、プロミック錠剤中粒 (成分 N-P-K=5-10-10) を 1 鉢に 1 個施用した。

対象品種

1 品種あたりほぼ大きさの揃った球根 12 球を 1 球ずつ 2 号のビニールポットに植えて芽出しを行った。そのうちの極端に大きな株や小さい株を 2 株除外し、大きさが比較的揃った 10 球を底面給水用の鉢とコントロールの鉢にそれぞれ 5 球ずつ定植した。底面給水用の鉢とコントロールの鉢で株の大きさが同じになった 5 品種を対象としていたが、そのうちの 3 品種が途中でダニの被害を受けたため、残る 2 品種で試験を続けた。

調査方法

①生育比較

定植時と定植以降 2 週間目ごとに 5 株のうち平均的な 1 株を選んでその株長を測定した。測定期間は栽培場所で株の先端が寒冷紗に触れる直前の 7

月末までとした。

②輪数比較

7 月末までの 1 鉢の輪数 (5 株の合計) を数えた。

③球根数比較

結果

品種名	栽培方法	定植日	株 長 (c m)							初開花日	花数	球根数
			定植時	2 週間後	4 週間後	6 週間後	8 週間後	10 週間後	12 週間後			
モーブ クイン	底面給水栽培	5 月 1 日	10	20	30	42	50	54	56.5	6 月 2 日	67	78
	通常栽培			21.5	31	44	50	56	58.5	5 月 28 日	88	54
アンブロイス フェルス ハーフェルト	底面給水栽培	5 月 6 日	10	17	27	42	52	57	59	6 月 10 日	125	114
	通常栽培			18	26	38	47	52	57	6 月 10 日	68	44

考察

今回の結果から、コントロールと比較して遜色のない結果が得られた。傾向としては、底面給水栽培の方が球根数が多かった。常時用土が湿っている底面給水栽培では、根張りが貧弱で、球根数が少なくなるのではないかと予想していたが、コントロール以上の球根が得られた。この結果から球根形成には十分な水分が必要と思われる。

花数、株長については、はっきりとした傾向は認められなかった。ただ、今回対象の 2 品種以外の傾向を見ると、底面給水栽培の方が花数が多く、若干徒長する傾向があった。花数の多寡には、水切れによるストレスが関係していると考えられる。コントロールは原則、鉢土の表面が乾いたら、かん水を行っているが、2 日間かん水できないとしおれてい

地上部が黄変してきた段階で、底面給水鉢も水槽から引き上げ、コントロールの鉢と同様の水管理を行った。12 月上旬には地上部が完全に枯れ、12 月下旬に掘り上げて球根数を調査した (写真 5)。

る場合がしばしばあった。このことから通常栽培では水切れによるストレスを受けることがあるため、輪数が減少する結果になっているものと思われる。

試験対象の 2 品種では起こらなかったが、品種によっては、不織布による水分の供給よりも根からの水分吸収の方が上回り、乾燥してしおれることがあった。このため、5 号鉢では、不織布の長さは鉢の高さの半分程度までは必要であると思われる。

今回の試験により、底面給水栽培は十分活用できると考えている。この栽培方法の導入により、かん水にかかる時間が大幅に削減 (通常栽培: 約 2 時間半 / 週、底面給水栽培: 約 10 分 / 週) でき、業務の省力化が図られると思う。



写真 1.



写真 2.



写真 4.

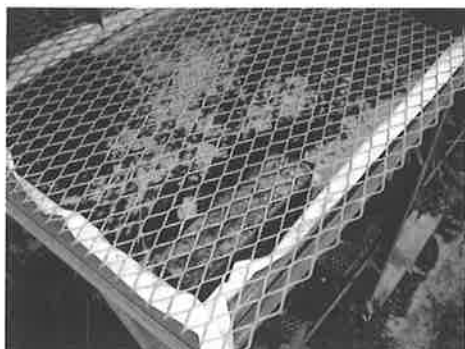


写真 3.



写真 5. 鉢から得られた球根数の比較 左: 底面給水栽培 右: コントロール (品種: アンブロイス フェルスハーフェルト)